

## 国内経済情勢

### 概観

実体経済は依然かなりの拡大基調にあり、生産は9月、10月と大幅に上昇、一方総需要も設備投資、個人消費を中心に根強い増勢を示している。商品市況は鉄鋼、非鉄をはじめ多くの品目で堅調を続け、卸売物価も騰勢を持續している。企業の業績は製品価格の上昇もあって引き続き好調で、9月期決算は8期連続の増収、増益を記録した。このような状況から企業マインドは依然強気にうかがわれる。

かかる情勢下、企業の資金需要は当面の決算・年末要資も加わって一段と増高をみているが、一方銀行の融資態度はしだいにきびしさを加えつつある。このため企業の借入れ態度はさらに真剣みを増し、銀行の貸出金利も比較的急速な上昇を示している。

10月の国際収支は季節的事情による貿易収支の黒字幅縮小などから、総合収支では187百万ドルと前月に比べれば黒字幅が減少したが、基調としては引き続き好調である。

**生産、出荷は増勢を持續、企業マインドも引き続き強気**

鋳工業生産(季節調整済み)は、7～9月に前期比+4.2%と相当な増加をみたあと、10月(速報)も前月比+2.9%の大幅増加を示し、依然根強い増勢を続けている。当月の増加は主として一般資本財(金属加工機械、ボイラー等)、建設資

材(アルミサッシ、鉄骨、橋りょう等)の著増によるものであるが、その他各財も軒並み増加した。

一方、鋳工業出荷(季節調整済み)も、7～9月に前期比+3.5%の増加をみたあと、10月(速報)は前月比+2.7%の大幅増加を示し、前年同月比でみても+20.8%と42年1月以来の高い伸びとなった。当月の増加には船舶の著増も大きく響いているが、前月好伸の反動もあって耐久消費財(エアコンディショナー、電気冷蔵庫等)がかなり減少をみたほかは各財とも増加した。

10月の生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、9月微減のあと前月比+2.4%の増加となったが、出荷の大幅増加により製品在庫率指数(91.5)は前月に引き続きわずかながら低下した。製品在庫を財別にみると、需要期控えの耐久消費財(石油ストーブ、カラーテレビ、乗用車等)が引き続きかなりの増加を示した反面、輸送機械(大型乗用車、トラック等)は大幅な減少となった。

このほど明らかになった主要企業の9月期決算状況をみると、内・外需の増大や製品価格の堅調を映じて、鉄鋼、建設をはじめほとんどの業種がかなりの増益となり、8期連続の増収、増益を記録した。もっとも、本年3月期に比べると増益率は若干ながら低下しているが、これは人件費と原材料価格の上昇によるものとみられる。

このような企業収益の好調や商品需給の堅調持續を背景に、企業マインドは引き続き強気のようにうかがわれる。11月時点調査の本行「主要企業

短期経済観測」によれば、先行き製品需給の引き締まりを見込む企業が多く、また設備投資(工事ベース、季節調整済み)についても、前回調査時(8月)の計画(年度間+21.9%)が再び増額修正され、下期の大幅増加(前期比+13.0%、上期同+10.3%)から、年度間では前年度比+24.0%と43年度実績(同+22.7%)を上回る計画となっていることが注目される。

個人消費の関連指標である全国百貨店売上高(季節調整済み)は、9月に前月比+4.1%の著伸をみたあと、10月(速報)は-1.2%の減少となったが、前年同月比増加率では+18.6%の高水準である。なお、11月も東京百貨店売上高は高い伸びを示した模様である。

#### 商品市況は堅調持続

最近の商品市況をみると、鉄鋼は大勢高値保合いながら一部(条鋼類)に小反発を示すものもみられ、また夏場来低迷を続けてきた綿糸、スフ糸等が久方ぶりに反騰、銅も再び強調に転ずるなど、主力商品は総じてしっかり商状を呈しており、その他の商品でも石油、化学品、紙等強含みのものが目だっている。このように秋口以降保合いに推移してきた主力商品の市況が最近再び堅調を示しているのは、海外市況の反騰、輸出価格の上昇、市況対策なども響いているが、ひところみられた高値警戒人気による訂正安の動きが一巡し、需給実勢の強さがあらためて見直されていることによる面が大きいようである。

こうした状況を映じて、卸売物価は9月に前月比+0.7%の急騰をみたあと、10月も+0.3%の上昇を示し、本年2月以来9ヵ月にわたる連騰(この間の上昇率+3.0%)となった。11月にはいつてからも、鉄鋼、非鉄等を中心に根強い騰勢を続けており、上旬は前旬比+0.1%、中旬も同+0.1%

の上昇となった。

一方消費者物価(東京)は、10月、11月とも前月比-0.2%の微落を示したが、季節商品を除けばそれぞれ+0.7%および+0.4%の上昇となっている。

#### 市中貸出金利は引き続き上昇

10月の金融市場は、銀行券が還収超(38億円、前年同191億円)となったものの、財政資金の払超額(1,980億円)は前年(同2,938億円)を下回り、また本行が短期買入債券の売戻し、短資業者に対する政府短期証券の売却などを行なったこともあって、資金需給は引きゆるみをみせることなく推移した。

11月にはいつて銀行券は月中1,284億円の発行超(前年同930億円)となったが、一方財政資金が米代金、交付税交付金の支払などから6,433億円の大払超(前年同6,155億円)となり、市場の資金余剰は多額に上った。これに対して本行は前月と同様、短期買入債券の売戻し、短資業者向け政府短期証券の売却のほか貸出回収によって余剰資金の吸収を図り、このためコール・レートは前月に引き続き季節的低下を示すことなく推移し、さらに年末資金繁忙期を迎えて12月1日以降、各条件物とも年利0.25%の上昇をみた。

銀行券の月中平均発行残高の前年比増加率は、8月以降3ヵ月連続して18%台の高い伸びを続けたあと、11月も+19.3%と、個人所得の増大や消費の堅調を映じ引き続き根強い増勢を示している。

10月の全国銀行貸出は月中2,171億円の増加となり、前年同月(1,832億円増)比では+18.5%と増加率がかかなり低下した。業態別にみると、地方銀行が前月に引き続き落ち着いた動きを示したほか、これまで著増を続けてきた都市銀行、長期信

用銀行の伸びも鈍化した。一方、中小企業金融機関では、相互銀行、信用金庫とも当月は再び相当な増勢を示した。都市銀行などの貸出の増勢が鈍ったのは、今後年末にかけて需資増高期を迎えることもあり、銀行がポジション面への配慮をいっそう強め、融資の抑制に努めたことによるところが大きいとみられる。

このように銀行の融資態度がしだいにきびしさを加えている一方、企業の資金需要は根強い経済活動の拡大に伴い運転・設備両面にわたって高水準を続けており、とくに当面決算資金、年末資金の増高も見込まれるところから、借入れ態度は一段と真剣みを増している。前記「主要企業短期経済観測」をみても、先行き資金繰りが苦しくなり、手元流動性がかなり低下すると予想する企業が多い。なお企業間信用については、目下のところ全体としてはあまり大きな変化はみられないが、一部では決済条件悪化の動きも広がりは始めている。

こうした情勢を背景に、銀行の利上げ交渉は比較的急速に進展しており、10月の全国銀行貸出約定平均金利は、前月(0.017%の上昇)に引き続き月中0.095%の大幅上昇となった。この結果、9～10月中の上昇幅は0.112%に上り、その公定歩合引上げ幅に対する割合は27.3%と、引締め開始後2ヵ月間の上げ幅としてはこれまでの最高となった。

この間公社債市況は、米代金の支払を背景に農林系統機関などの買入れが続いているため、10月中旬以降大勢保合いに推移している。

#### 国際収支は黒字幅前月比縮小するも好調続く

10月の国際収支をみると、季節的事情を主因とする貿易収支の黒字幅減少や証券投資の流入減などから、総合収支の黒字幅は月中187百万ドル

と、記録的な黒字を示現した前月(同341百万ドル)に比べればかなり縮小した。この間金融勘定では、為替銀行の対外短期ポジションが円シフトの進捗や保有輸出手形の増加を主因に大幅な改善を示し、外貨準備は月中8百万ドルの増加となった(月末残高3,234百万ドル)。

貿易収支を季節調整後でみると、輸入は根強い増勢基調にあるが、輸出も好調のため、月中248百万ドルの黒字(7～9月平均同269百万ドル)と引き続きかなりの黒字基調を維持している。

季節調整後の輸出は、9月に著伸をみたあと10月も前月比+0.1%の微増となり、前年同月比でも+20.0%と引き続き好調に推移している。品目別の動きを通関ベースでみると、食料品、天然繊維等が前年を下回った反面、化学製品、自動車、ラジオ等多数の商品が前年を2割以上上回る高い伸びを持続した。地域別には、西欧、中南米、アフリカ、共産圏などが前年比著伸をみたものの、米国、東南アジアは前年が高水準であったこともあり伸び率が低下した。なお先行指標である輸出信用状接受額(季節調整済み)は10月に前月比+3.8%と増加したあと、11月も同+1.9%、前年同月比では+24.5%と続伸した。

一方、10月の輸入は季節調整後の前月比で+2.3%、前年同月比で+25.6%と引き続き相当な増加を示した。品目別(通関ベース)にみると、鉄鋼原料(鉱石、石炭)、非鉄金属(鉱石、地金)、事務用機械等が高水準を続けているほか、木材、とうもろこし等の増加も目だっている。先行指標である輸入承認額をみても、前年同月比+29.0%、季節調整後の前月比で+4.4%と依然増勢が著しい。

(昭和44年12月2日)